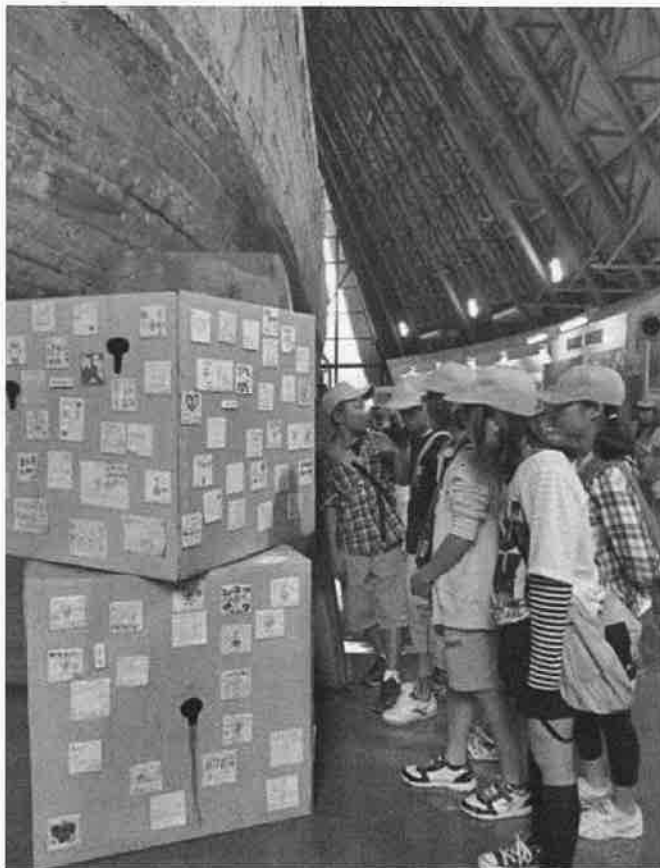
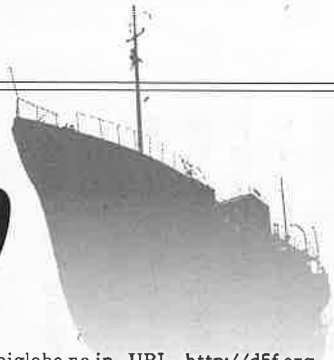


2011.11.01
No.366
(11・12月号)

福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の高2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



わたしは大きくなったら
「せんそうはいやです」とか
「すいぼくはいやです」と
きちんとこたえます。 小学2年生

命の重さを認識して生きることを学びます。
日常生活に戻ると、核からはなれ、
自分だけの幸せを追求しつちなので、
何處でも来て、核実験しよう。
深い命が失われたことを
深くにしみ、
人々に展示館のあることを
知らせていたいと思います。40代

こんなにかなしのおはなしがあるとは知りませんでした。
水ばく実験は人間にはいらぬということが、
よーくわかりました。
これからも第五福竜丸の話
おぼえていたいと思います。
小学4年生

核や戦争。
何も関係ない
動物や植物は
ただただ大迷惑。
30代

二度とこんなことはくり返さないように
世界中で話し合えばいいと思う。
この船もそうしないとうかばれないと思う。
小学6年生

写真右||メッセージ・カードが貼られた箱を見つめる小学生たち。
写真左||企画展「船を見つめた瞳」で展示中の言葉バナー。(詳細2面)

福竜丸の時代の体験を

今に生かし 伝える

あの東日本大震災から、季節がめぐり秋も深まるなか、放射能汚染の広がりに不安と、原発事故の長く続く収束への取り組みが報じられるも、とで、落ち着かない毎日が続きます。

展示館は、春の修学旅行を延期せざるを得なかった学校が、あらためて日程を組んで来館し、秋の行楽シーズンとも重なって、多くの来館者を迎えています。

とりわけ被災県からの修学旅行生は、これまでも増して集中してスタッフや、元乗組員大石又七さんの話を聞く姿が見受けられます。若い世代が、放射能とその影響を身近に感じているようすには、胸をつかれます。

震災時の模様を尋ねると「沿岸に比べれば、そんなに酷くなかった」と他の地域を気づかいながらも「怖かった」体験を話してくれる子、核実

験場になったマーシャルの人たちの「その後」を熱心に質問する生徒など、一人ひとりの心に震災・原発事故が影を落とすことに気づかされます。

また三重県、和歌山県からの修学旅行は年々増えていますが、九月初旬に紀伊半島を襲った大水害や台風の被害地域の学校も訪れ、「避難等で事前学習を積み重ねられなかった」と、引率の教員から伝えられる場面もありました。

繰り返される核実験による、環境の放射能汚染への不安にみまわれた「あの時代」と、それに立ち向かった人びとの歩みを伝えなければと、思いをあらたにしています。

子どももおとなも、不安や恐怖を体験したこの年に、「船を見つめる瞳||来館者の思い」が紡ぎだす言葉を、受け止め、次への発信に生かしたいと思います。

解説 船を見つめた瞳

市田真理

二〇一一年三月一日。
 ここ東京も震度五強という強大な力で揺さぶられました。多くの人が恐らくそうであつたように、私はひたすらうろたえ言葉を失いました。

本企画展は震災前―実は昨年下半年の企画として、数年前から構想されていました。開館から五年目に出版された感想文集『船を見つめた瞳』（同時代社）にタイトルを借り、開館三〇年の記念誌に収録した感想文録の続編と位置づけられるものです。

とはいえ、震災から半年を経て展覧会を開催するにあたり、「3・11」を全く意識せず、企画を進めることはできないことでもありました。

言葉のちからを信じたい

震災から数日後、交通網も電力も大混乱するさなか、静岡県浜松市の小学校から一冊の作文集が届けられました。いずれも丁寧な文字で綴られた作文は、日々の学びの痕跡

みでもあります。

言葉を展示する

「言葉選び」は、ボランティアの会との協働で作業しました。開館三〇年以降（二〇〇五年〜二〇一一年八月）の来館者アンケート五八一四通を中心に、修学旅行などの感想文・作文集やメッセージ・カードのほか、日々の活動を記録している「ボランティア日誌」を手分けして読み込み、抜き書きしてもらいました。そこから選んだ三五の言葉を、タテ二五〇cm、巾一〇三cmの七色のバナー（垂れ幕）に記しました。

本展示は、こうした来館者が船を見て感じたこと、考えたことを、その「言葉」を手がかりに共有しようとする試

メッセージボードには、これまで来館者が自由に書き遺していったカードを、子どもたちから届けられた絵・作文集などは、カラフルに塗られた八〇cm四方の箱に貼っています。このほかにもボランティア日誌やアンケートの抜き書きは、ファイル化して読めるようにしてあります。展示を観たあらたな来館者がメッセージ・カードを貼っていき、企画展開始時約一〇〇〇点から始まった「言



言葉は、日々増えていきます。

言葉からみえてくるもの

「震災前／震災後」で、言葉は変ったでしょうか？開館以来三五年の間に、船を見つめた瞳もまた、世界や社会の情勢と連動しているのでしょうか？

核保有国の核実験や被爆者の運動など、そのときどきの世情を反映している感想はもちろんたくさんありますが、むしろこの船の大きさから感じたこと、船が語りかけてくる声をうけとめた感性、未来への思いは、時代にかかわらず変らぬ言葉でつづられていたのです。大地震と津波、原発事故で

私たちの日常は断ち切られてしまいました。以前と変わらない思いと言葉を見つめなおすことで、「これから」を語る言葉をもう一度獲得できるのではないかと考えます。子どもたちの言葉には時として、骨をうがつような厳しい指摘もあり、たくさん生きてきた大人たちの感想には、反省と後悔と、若い世代への期待があふれています。また、日々の船と来館者を見つめる、ボランティアスタッフの瞳―ボランティア日誌には、そうした言葉をうけとめ、ともに感激し、ともに悲しむ言葉がたくさん綴られていました。いずれも、命を思い、命に寄り添う言葉だと感じます。揺らいでしまった日常を鎮め、取り戻すためには、長い時間と努力が必要とされると思います。そして、そうした日常は、言葉によって手練りよせることができるような気がします。船を見つめた言葉から、未来を感じとっていただければ嬉しいのです。（いちだ まり／企画展制作担当学芸員）

沈黙する船の声をきく

鈴木一琥

九月二三日の久保山忌。企画展「船を見つめた瞳」のオープニング・アクトに、ダンス公演「龍の声」をおこなった鈴木一琥さんと、企画展のアートディレクションを担当したデザイナーの上浦智宏さんに寄稿いただきました。

闇に浮かぶ船体を前にしたパフォーマンスの後は、トークも行われ、約七〇名が参加しました。

第五福竜丸のもとは何かで、きかないかと、展示館に相談させていただいたのは、今から二年前になります。その当時私が知っていたのは、半世紀余り前、ビキニ環礁という太平洋の美しい海で水爆実験にあった漁船が夢の島にある、ということぐらいでした。

私自身、インドネシアやニュージールランドなど、太平洋

の島々でダンスを作ってきたこともあり、福竜丸の存在には、不思議な親近感がありました。なによりもまず、生き証人として語られてきた第五福竜丸そのものをもっとよく知らなければというのが、じまりでした。

今年三月、福島で大規模な原発の事故が起こり、被曝ということがこの東京でも、ひとごとではなくなり



写真 ダイトウノウケン

五月には娘が生まれ、状況によっては避難する可能性を何度も想像しながらの暮らしてました。そんな状況下での「龍の声」公演となりました。

今作品「龍の声」は、福竜丸という漁船はいままで、さまざまな形で語られてきたものの、福竜丸はどのように感じ、考え、存在しているのか、

福竜丸自身に問いかけてみたいということが根幹にありました。それが少しでも聞こえてくるように、作品化したいという思いでした。

船を見つめる瞳が、人間の側からの視線であれば、「龍の声」は、船からの視線と言います。

船が語ることば

上浦智宏

「今の心を忘れずに大人になりたい……」中学生のこのことばにドキッとしました。僕自身忘れていた時期があり、福竜丸展示館と出会えたことでその心を再び思い出させてもらったからです。

こんなことばもありました「日常生活に戻ると自分だけの幸せを追求しがち……」こんなに心底ドキッとさせられる展示会も珍しいのでは。そう思いながらこの度、展示制作に関わらせていただきました。

換えてもいいかもしれません。双方の視線が交錯すると

きに、私たちは私たち自身をまっさらな目で見つめることになるのではと考えました。

作品は、スタッフ・ボランティアの多大な協力のもと上演することができました。

これからも、福竜丸が見つめる瞳を感じながら、ひとり人間として福竜丸を見つめて続けていきたいと思えます。(すずき いっこ/ダンサー)

た。

ことばの展示会。福竜丸を見て感じて出てくることばは、まるで船自身が人間を通して「ことば」というカタチで僕たちにメッセージを伝えていくかのように思えます。

福竜丸はただそこにあるだけ、またはいるだけでメッセージを放っています。大きな「無言」で伝えてきます。今回、たくさんのことばから改めて感じました。

一〇年前、僕が初めて福竜

丸展示館に訪れた日、生き物の顔のようにも見える船首が何かを言おうとしているように思え、一瞬縮こまったことを思い出します。そして同時に「これが現実なんだ」と気付かされました。

人間が同じ人間を理不尽に苦しめ、命をも奪う。同じ地球上で生きている他の命たちにはどう見えているのでしょうか。理解不能と同時に、彼らにとっては迷惑。けつして人間だけの問題ではないという感じます。

一人でも多くの人たちが船からのメッセージを聞き、一人でも多くの人たちが命について、ほんの少しの時間を費やし思ってみる。

それが平和への大きな第一歩になるのではないのでしょうか。この船を知り、触れた人は自分を含め、恵まれていると思えます。そんな大切なきっかけを与えてもらったからです。未来の自分たちのためにも大切なことだと思えます。

(うえうら ともひろ/デザイナー・うぶすな主宰)

福竜丸だよりの読者には、今回の震災で被災された地域の方や団体が多数おられます。福島県原爆被害者協議会事務局長・星埜惇さんよりお便りを頂戴しましたので紹介します。

*

お気持ちのこもったお便りをいただき、ありがとうございます。私のところは福島の被爆者の窓口なものですから、被団協の紹介もあって、四月の初めから新聞やテレビの記者が殺到しました。今も続いています。初めはこの報道機関も「二度目の被曝」に關する「感想」のようなものを尋ねてきました。

「二度目の被曝」という言い方に、大変違和感を感じ、私たちは「二度と被爆者をつくるな」という目的で動いているのだから、まだ新たな被爆者になっていけないのに、勝手に被爆者をつくらないでほしいと、最初は言いました。わかってくれた記者は、発想が間違っていたかもしれない、出直してきますと言ってくれた人もありましたがい

つまでも興味本位を改めない記者もいました。

今、福島第一原発の事故で、実際に「被曝者」と確認されているのは、電力会社の配慮を欠いた対処で生じた、作業員の人たちでしょう。それを周辺の人たちに披延し、本当に被曝者にしないよう、政府や東電に訴えてきましたが、どうも広島や長崎、そしてビキニの被爆者とは異なった

二度と

被ばく者を

つくるな

～福島からの手紙～

低線量の放射能を長時間浴び続ける「被曝者」がつくり出されようとしています。

この人たちの状態をどう捉えるのか、全く未知の領域です。今までのような、電力からお金をもらって「研究」してきた学者たちにはできない、人間の立場に立った研究に、真剣に取り組んでくれる研究者、自治体、国になってほしいと思います。

風評被害も、一括して福島の生産物を汚染作物にしたのは政府です。より細かい地域別に、正確な核種と線量を発表し、それが年齢別にどの程度の被害をもたらすのかといった、もっと思いやりのある政治、行政に変わってほしいと切望しています。

福島県は脱原発を宣言しましたが、政府の脱原発は一人の考えにすり替えられ、逆行する言動が始めました。

私たちは福島から被曝者を生まないよう、なお「二度と被曝者をつくるな」と言い続けていくつもりですが、眼前に見える嘘だらけ、後出しだらけの東京電力の発表を聞くにつけ、怒りがこみあげてくる毎日です。しかし、まだまだ生きて、反核を訴えるのが私たちの仕事ですから、怒ってばかりではいけません。

展示館でのお仕事は、ビキニの被曝者以上に、ビキニ被曝のことを、広く深く勉強されないとならない、大切なお仕事だと思えます。どうかお元気に、おからだには充分お気をつけてお過ごしくださいますよう。

第五福竜丸にふれ、

原水爆・原発をやめさせよう

飯田史朗

さる九月二三日、第三一回久保山忌句会を行った。最優秀作品に与えられる「船員証」受賞句は、次の一句。

遺言の歯ぎしりに揺れざくろの実 望月たけし

ビキニ環礁でのアメリカの核実験で死の灰を浴びた第五福竜丸は、一九六七年、ごみの埋め立て地、夢の島に廃棄されているのが発見された。

フを作り、当日午後には、平和協会の奥山修平理事（中央大学教授）にミニ講演をして戴いた。

保存がよびかけられ、その頃から新俳句人連盟は吟行を重ねてきた。その様子はNK Kドキュメンタリー「廃船」で紹介されている。多くの人の保存の運動で完成した。死の灰の生き証人。第五福竜丸展示館で八一年九月二三日に最初の久保山忌句俳句会が開かれ、今日までつづけてきた（二回目より久保山忌句会）。

また久保山愛吉さんの碑前での献花のあとに、川崎昭一郎協会代表理事、安田和也事務局長からご挨拶を戴いた。それぞれの話のなかで、福島原発事故は安全神話による人災であり、被爆国日本で原発を受け入れてはならないこと、今後の放射線被害を詳細に追跡することの重要性をうかがった。

今年の句会に先立ち、3・11東日本大震災による福島原発事故で再び被ばくの被害をつくりだしたことへの「ビキニの死の灰よりフクシマの死の灰へ」の小冊子・俳句パン

この日の作品でもフクシマを詠ったものが多く、冒頭句も「遺言の歯ぎしり」と愛吉さんの思いを内包し、原発を告発している。（いいだ しろろ／新俳句人連盟事務局長）

第五福竜丸事件と3・11

「ベン・シャーン クロスメディア
ア・アーティスト」展によせて

荒木康子

ベン・シャーン(1898

—1969)というアメリカの画家がいた。彼は19世紀末、東欧から大量にアメリカに流入したユダヤ人移民の一人だった。迫害を逃れて一家でリトアニアからニューヨークにやってきた彼は、初等教育を終えて間もなく石版画工として働き始める。一方、貧しいながらも夜間学校や大学で絵の勉強をし、やがて画家として歩み始めた。

その出発点となったのは、



品として知られているのが

福竜丸との出会い

シャーン晩年の重要な作品として知られているのが「ラッキードラゴン」シリーズである。第五福竜丸事件とシャーンの関わりは長い。

1957年、長年のつきあいのあったある編集者から、原子核物理学者ラ

ルフ・ラップ博士のエッセー「ラッキードラゴンの航海」に挿絵をつけてくれないかと依頼されたのである。シャーンは引き受けた。

すでにこの事件のことは知っていた。1950年代初めから、シャーンはアメリカの水爆実験について危惧の言葉を残していたのだから、当然ではある。そして、3回の連載のために、14点の挿絵を描いた。

しかし関わりは挿絵の仕事では終わらなかつた。1960年、アジア旅行の一貫で40日の日本滞在。この旅行を経て1961年に「ラッキードラゴン伝説」という個展を開催し、11点のテンペラ、水彩作品を発表したのである。しかし当時のアメリカ美術界を席捲していたのは抽象表現主義。「ラッキードラゴン」というテーマに振り向かれることはなかつた。

核の時代を見据える

しかしシャーンは1965年、反戦雑誌『War/Peace Report』の創刊者リチャード・ハドソンとともに『久保山と

ラッキードラゴン伝説』という本を出版。そこに、先の個展で発表した絵画作品と素描を掲載。本の装丁も手がけた。なんと足かけ9年にもわたって、第五福竜丸事件に関わりを持ち続けたのである。これらはまさに晩年の重要な作品群として位置づけてよい。そのアプローチは、核による無差別殺戮を告発するのではなく、人間としての深い哀しみと悔恨といった情感をすく上げるものであった。加害者の顔が見えない、いや、人類皆が加害者であるともいえるこの現代社会の巨大犯罪の構造を鋭く指摘しているといえるかもしれない。

明日へ向ける眼差しを

今年の3・11東日本大震災、そしてそれに起因する福島第一原発事故。天災であるとともに人災でもあるこの未曾有の事故を考える時、ベン・シャーンのこの連作は、大きな意味を持つてくるだろう。

実は私は震災前からベン・シャーンのリターン展を準備していた。もちろん「ラッキードラゴン」シリーズの一部もご

紹介する。紆余曲折ありながら、ようやく今年12月に巡回展が神奈川県立近代美術館葉山でオープンすることになっていた。そのラスト・ステージに起こった大災害と放射能被害。今、美術に何ができるのだろうか。どのような表現があり得るのだろうか。美術館ができることは何なのか。期せずしてそんな課題が投げかけられた私たちにとって、このタイミングの良さ／悪さは天の配剤であろうか。このベン・シャーン展は、私たちが真摯な一歩を新たに踏み出すための、小さな勇気を与えてくれるに違いない。そう願っている。(あらかし やすこ／福島県立美術館学芸員)

*

ベン・シャーン展の日程

◇神奈川県立近代美術館葉山館2011年12月3日～2012年1月29日／名古屋市美術館2月11日～3月25日／岡山県立美術館4月8日～5月20日／福島県立美術館6月3日～7月16日
http://benshahn2011-12exinfo/

怒りと意志を持つ人の書 大石又七さんの『矛盾』を読んで

内海愛子

「肝臓ガン」という単語がずらりと並ぶ。第五福竜丸乗組員(二三人)のうち死亡した一四人、その中の八人が「肝臓ガン」である。無線長の久保山愛吉さんは肝機能障害、甲板長の川島正義さんも肝機能障害、肝硬変も併発していた。大腸ガン、結腸ガンで死亡している人もいる。しかも被爆してから二〇年、長い人は五〇年以上が経過しての発病である。筆者の大石さんも肝臓ガン、肺過誤腫など多くの病気をかかえている。この死亡一覽(二四二―二四四頁)にフクシマの「今」と「将来」が重なる。被爆しながら仕事をしている原発の作業員はもちろん汚染地域で暮らす子供た

ちの未来への不安である。親や教師たちが必死に政府や東電に対策を求め、責任を追及しているが、拡大する放射能被害は深刻である。

被爆、放射能という言葉から私たちは原爆投下直後の衝撃的な映像を思い描く。外見上は健康者とおなじだが「内部被爆」によってじわじわと体を蝕まれていく人たちの恐怖への想像力が欠如しがちである。テレビや写真で見ると、大石さんは一見、健康そうに見える。被ばくの後遺症と妬み(二七頁)という二重の恐怖にさらされた苦難な歲月は、温厚な風貌のなかに包み込まれている。



一時は盛り上がった反対運動は潮が引くように引いていった。だが、原水禁運動が生まれ、被害者の闘いが続く中で、映画やテレビもくりかえし問題をとり上げ、第五福竜丸は反核平和運動のもう一つのシンボルとなつていった。巻末には

一九八四年からはじまった大石さんの「語り部」活動の一覧がある。二〇一一年三月一日

の中止まで延々と続く活動は、中高校、大学、市民の集まりなど、全国にひろがっている。政府と巨大資本がかき消そうとしてきた「放射能汚染」の恐怖を体験者として語りづけ、「核の平和利用」というデマゴグに鋭い批判を加える。東電などが札びらでメディアに沈黙を強いてきたなかで、私たちの感性が鈍り、いつのまにか原発の危険性に鈍感になって、パソコンの電源スイッチをいれる。便利で快適な生活の裏に潜む原発の危険性を分かつたつもりで見過ごしてきた。

*

大石さんの全国をめぐる話も、時としては聴衆が十分にうけとめられなかったこともあつただろう。落ち込むこともあつたのではないだろうか。それでも病気をかかえながら二五年も講演を続けてきたのは、被爆者としての使命感であり、「怒り」だと思われる。本書の随所に怒っている大石さんの鋭い発言がある。被害者は、物事の本質がよく見える。その

怒りが多くの報告書や文献を読み込む力となり、鋭い批判となつている。

静かな怒りの中に込められた熱い心と冷静な判断力が、大石さんの行動と発言を支えている。本書はこうした怒っている大石さんが、考え、調査したことを、俺という一人称でまとめたものである。だから面白い。共感をよぶ。

構成は、

- 1、漁師が歩んだ核兵器と戦争の道
- 2、人類の起源
- 3、戦争を作る人たち
- 4、テロリストとは
- 5、平和な地球にしようよエピローグ

これに関連年表が付されている。年表からは反核運動やピキニの「忘却」と闘ってきたメディアや動き、政府の原子力政策も概観できる。ピキニから続く「反核運動の「中心」にいた大石さんが発してきた熱いメッセージを収録した本書はフクシマを考えるためにも読んでほしい。怒ることの大切さを大石さんは教えてくれる。

(うつみ あいこ／早稲田大学大学院客員教授)

◇『矛盾』ピキニ事件、平和運動の原点』武蔵野書房刊 二八四頁一八〇〇円十税。

◆第五福竜丸展示館からお送りします。送料実費がプラスされます。また、書店でもご注文できます。お近くの図書館などに備えるようお声掛けください。

【大石さんのこれまでの著作】

*『死の灰を背負って―私の人生を変えた第五福竜丸』1991年新潮社：NHKドキュメンタリー「廃船」を製作した工藤敏樹プロデューサーの尽力により世に出た大石さんの最初の著作。絶版ですが古書店などで探せます。

*『ピキニ事件の真実』いのちの岐路で』2003年みすず書房。ピキニ事件半世紀を前に、事件の究明や公表された外交文書を読み込み、ピキニ事件の真実を問う。

*『これだけは伝えておきたい』ピキニ事件の表と裏』2007年かもがわ出版。小中高校生への体験の講話や講演活動をとおして、事件を一人でも多くの若い世代に伝えたい、との書き下ろしです。



連載①

晴れた日に 雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄

『ビキニ水爆被災資料集』の

編集後記は編集委員のメンバーを、前号で紹介した人たちに加えて、林茂夫、森下一徹、桂川秀嗣、香取良平、対馬学、川上とし子の各氏を、私も含め紹介しています。

ここに記されている各氏の協力はありましたが、資料調査から原稿の完成まで、編集全体を担われたのは林茂夫さんでした。当時、林さんは日本平和委員会の専従を退かれて、軍

事・社会評論の専門家としての仕事に就かれていました。私は、林さんとは、平和委員会や原水協の仕事と一緒にしたことなどから、林さんの綿密な仕事ぶりは先刻承知していました。

*

「最初に直面した問題は、そもそもビキニ事件関係資料にどのようなものがあるのか、どの範囲までが関係資料といえるのかという、いわば資料収集以前の問題であった」『資料集』巻末に載る「資料収集にあたって」に林さんが記しているように、作業は、まずビキニ事件の推移を丹念に追跡し直し、調査することから始まりました。

林さんは、一年有余をかけた事件の関係者、当時公刊された書誌、各紙縮刷版に当たる一方、新聞社調査室、国会図書館などに通いました。戦後の雑誌などを収蔵する「大宅文庫」も訪ねています。

編集協力メンバーは、林さんのメモと分類にもとづいて資料目録ノートづくりを分担します。ワープロ、パソコンはまだ普及していませんでしたから手書きです。林さんは半ば

専任ですが、協力メンバーは、川上さんが保存委員会の事務アルバイトですが、他は団体職員、教師、研究者などすべてボランティアです。

平和協会事務所は都労連にありましたが編集作業の机はありません。連載②でもふれましたが、保存委員会事務所は東友会に置かれ、机は日本原水協資料室に置かれていました。林さんはここに通い、資料もここに保管しました。

*

関係資料の全容がほぼ掴めたところで収集にとりかかりました。収集には、困難や壁が待ち構えていました。

「たまたまこのことが新聞で報道されたため、関係当局から国のしたことをあばきたるようなことには協力できない」と拒否され、まず政府関係の資料収集が「厚い壁」にぶつかつた」

「焼津市の倉庫深くうずもれ、市の関係者すら、所在不明と信じていた焼津市関係の資料も、われわれの調査がきっかけで再発見されたが、その後市として公表するとのことで、閲覧も許されなかった」。

資料は市従業員組合の協力で見つかったもので、その時点では、市は公開を約束していたのです。なお、この焼津市資料は、一九七六年一月に『第五福竜丸事件』として市から刊行されています。

「調査の最終段階で、事件の処理方針大綱を決めた閣議決定が、内閣官房の書庫の奥深く保存されていることをつきとめ、担当者から外務省とも相談してその返事も得た。だが国会議員を通じての資料請求にたいする外務省の回答は「マル秘扱いなので見せられないというものだった」。

*

「資料収集作業は、時間と予算の制約や、われわれの力不足もあって、日米両政府の圧力があつたであろうことを随所で感じさせられながら、それを裏づける決定的な公式資料は入手できずにおわつた。ここではいちいちあげないが、ビキニ事件には、今なお「ナゾ」につつまれている部分が多く残されている」。先にあげた「資料編集にあたって」に林さんはこう書き残しています。

『資料集』の原稿が一応まと

められたのは七五年一二月、作業は林さんや私たちの手を離れ、東大出版会に渡りました。以後、協会の田沼肇理事を中心に編集が進み、七六年三月刊行されるのです。

*

『ビキニ水爆被災資料集』はビキニ事件を知る基本文献として、その価値は褪せることはありません。

刊行から三五年。この間、一九九一年にはビキニ事件に関する外交文書公開があり、また、豊崎博光さんや高橋博子さんの著作や研究、新たな資料の入手、大石又七さんの著書も刊行されています。いま、3・11の大震災、原発事故と第五福竜丸に想いがめぐります。続『ビキニ水爆被災資料集』編集・刊行のプロジェクトは起ち上げられないでしょうか。

◆林茂夫さんは平和運動体験を土台にした軍事評論、自衛隊問題の第一人者であり、無防備地域運動の提唱実践者でもありました。二〇〇四年七月一八日死去、七五歳でした。(やまむら しげお／第五福竜丸平和協会顧問)

秋晴れの久保山忌



今年も、久保山愛吉さんの命日9月23日に、久保山忌句会（4面記事）をはじめさまざまな取り組みが行われました。

東京原水協などによる「第25回第五福竜丸のつどい」は、川崎昭一郎代表理事の解説で館内を見学した後、久保山碑に献花しました。午後からは公園内、東京スポーツ文化館にて学習会を開き、青木佳子さんが「福島原発事故とビキニ事件と原水爆禁止運動」をテーマに講演しました。

19回目をむかえる「平和を語る第五福竜丸のつどい」（実行委員会主催）は、朗読や演奏、紙芝居などが繰り広げられ、第五福竜丸ボランティアの会は「船を見つめた瞳～ボランティア編」の朗読で出演しました。また、会からは多額の寄附が寄せられました。

築地にマグロ塚を作る会は、展示館庭のマグロ塚前で会食しながら平和を語りあいました。主宰の大石又七さんは、それぞれの行事で挨拶する合間をぬって、来館者とも懇談しました。秋の好日、展示館は終日にぎわいました。

エンジン錆止め薬塗布作業

例年は真夏の炎天下で行っていたエンジンのメンテナンス作業ですが、今年は秋風爽やかな10月10日に、ボランティアスタッフにより行われました。作業には、東京文化財研究所保存修復科学センターの池田芳妃さんも加わり、清掃と剥落片を除去した後、タンニン酸を塗布しました。

作業後には、今後の保存についての

課題を検討し、映像による記録などの構想が討議されました。



企画展「ビキニ事件 新聞切抜帖」終了

57年前、ビキニ事件当時の地方新聞から時代を読みとく、企画展「ビキニ事件新聞切抜帖～第五福竜丸の被災と人びとの暮らし」が3か月の会期を終え終了しました。福竜丸だよりに既報のとおり、会期中に3回行われた市民講座にはのべ200人が参加しました。来館者からは「いまの報道と重なりますね」という声が多く、アンケートに記された感想等は、現在開催中の「船を見つめた瞳」でも紹介されています。

また夏休みイベントで行われたミニ企画展「本多猪四郎 ゴジラを生んだ映画監督」（8月19日～21日）の最終日トークショーには、安田和也事務局局長も加わり、本多隆司さん、西田和昭さんと鼎談しました。約100名のゴジラファンが集まり、映画『ゴジラ』（1954年）の誕生秘話や当時の時代背景などに耳を傾けました。トークの様子は収録され、cFM（コミュニティ・エフエム）でオンエアされました。

「明日の神話」すず払い

岡本太郎の最大の壁画作品「明日の神話」の恒例の「すず払い」がNPO法人・明日の神話保全継承機構の呼びかけで10月29日にその第一回が行われ、第五福竜丸平和協会からも作業に参加しました。東京・渋谷駅のコンコースに展示される幅30メートル、高さ6メートルの作品は、原水爆の炸



裂と人びと、生物、飛散するキノコ雲とマグロを引く第五福竜丸が描かれ、現代に作家のメッセージを発し続けています。

毎日30万人が通行するという作品の表面に付着したチリや埃を柔らかい刷毛で払う作業と作品を修復した美術家の吉村絵美留さんによる点検と補修も行われました。

寄付金に対する 税額控除について

公益財団法人第五福竜丸平和協会は10月26日付で「税額控除に係る証明書」をいただきました。有効期間は5年間です。

*

これまでの寄附金控除制度は「所得控除」：（所得金額－所得控除額）×税率で税額が決められます。

新たな寄附金控除制度は「税額控除」：（税額控除対象法人への寄附金額－2,000円）×40%で税額控除額が決められます。この税額控除額を税額から直接控除します。税率に関係なく、税額から直接控除するため小口の寄附にも減税効果が大きくなります。

本年1月1日からの賛助会費を含む当法人への寄附金が対象になります。来年2～3月の確定申告の際、上記「証明書」のコピーと領収書が必要であり、事務局で用意いたします。「証明書」コピーを賛助会員及び寄附者全員にお送りしますが、領収書がご入用の方はご連絡ください。